

C-61 生活美学についての一考察  
県立新潟女短大 山崎光子

目的 我々は生きて生活していく中で多くの美的体験をするが、それらは人の心をうつ共通の美的根拠を内包しているのではないか。生活美学が美の存在領域の中で認められるか否かは問題であろうが、とりあえず私見をまとめてみた。

方法 諸文献ならびに創作活動体験をもとに考察した。

結果 一般に美の領域に属するものには、自然美と、美の理念の実現を目的とした芸術とが認められているが、美は感性的存在であり、人の意識の上にはじめて成り立つものであってみれば、もし人が芸術の範囲をこえた日常生活の中に美を感じるとしたら生活美はその存在する場をもつことにはばると思われる。歴史をふりかえてみても、芸術の概念の圏外でつくり出されたものの中に高度の美が存在している。すなわち機能的な造形物であれ、自律的に美を追求した芸術であれ、同様に生活美学の対象とばかりすると考える。

もっともそれらは客体自体が美的であるわけではなく、人に美的感動をひき起こさせるためには何らかの要因を内包していなければならない。創造物はいずれも様々な制約に拘束されながらつくられるが、創造者がそれを充分にふまえて、その上に築かれる創造空間に自己の精神を浸透させた時、観照者の共感を呼び、それが美的根拠となるのではないだろうか。創造空間の大小や創造に至る契機は美的価値の大きさに必ずしも比例せず、ただ、互に生きて生活している創る側と享受する側との精神の交流の中にはじめて美は生れうると考える。